

英進館
師弟対談企画

部活生支援し、強い心育む

英進館
代表取締役社長

筒井 俊英 氏

筑波大学情報学群在学
ラグビー日本代表

福岡 堅樹 氏

九州を代表する進学塾である英進館は、学力向上だけでなく、「自立した社会人の育成」を理念に掲げ、子どもたちの夢実現のサポートも行う。同塾の筒井俊英社長と同塾の塾生だったラグビー日本代表の福岡堅樹選手が、夢を実現させるための方法や部活と勉強を両立させることの意義などについて語り合った。

文武両道を後押し 社会人の基礎つくる

―部活と勉強の両立を目指す塾生に向け、どのような支援をしていますか。

筒井 授業の開始時間が遅めのクラスを設定したり、部活などで遅刻した場合、無料補習でフォローするなど、細やかな対応をしています。部活生を応援することは、進学塾の本来の目的とはあまり関係ないようにも見えますが、英進館の理念である「自立した社会人の育成」を通して見ると、勉強と同様に部活も大切という考えに至ります。

部活には、机の上の勉強では学べないことがたくさんあります。縦社会の中で年長者を敬い、チー



ム内で自分の役割を見つけコミュニケーション能力を磨き、試合では極限のプレッシャーと闘いながら強い精神力を育む。社会に出たときに必要とされるスキルが身に付きます。

―福岡選手は、学業との両立はどのようにしていたのですか。

福岡 文武両道を極めるためには、限られた時間をどのように使うかが一番の鍵。英進館時代に学んだことは、授業はただ聞くのではなく、先生の話に集中し、何がポイントなのかを考えてその場で吸収すること。高校進学後は、さらに部活の時間が増えたので、英進館での基礎がなかったら大

変だったと思います。

筒井 英進館に通ってくれている多くの塾生は、福岡選手のように高い目標を持って部活に励んでいます。その分、勉強に対しても真剣です。とはいえ、文武両道を高いレベルで満たそうとすると、1人でモチベーションを維持するのは難しいものです。

福岡 おっしゃる通りです。中学校のクラスで同じ高校を目指す級友は少なくても、英進館のクラスには同じ目標を持った仲間がたくさんいました。周りが頑張っているのに、自分が頑張らない理由はありません。そのように仲間と切磋琢磨（せつさたくま）できる環境が英進館にはありました。

―先生との思い出はありますか。

福岡 高校受験の前日、気持ちが高揚していた僕を見抜いた先生から、落ち着くことを諭すようなアドバイスがありました。それがあったからこそ、いつもの平常心で試験に臨めました。振り返ると、英進館の先生たちは生徒一人一人の性格と心の状態を見守り、それに合わせた指導をしてくれていたのだと思います。

夢を明確化させる 早めのキャリア教育

―英進館が目指す「自立した社会人の育成」とはどのようなものですか。

筒井 「自立した社会人」とは、大学卒業後、仕事にやりがいを持ち、困難にくじけず、社会の役に立つて、世の中から必要とされているというプライドを持ちながら生きる人のことです。全社員がその考えを共有し、塾生を指導しています。

―具体的な取り組みは。

筒井 中学生には、カリキュラムの中に「将来設計キャリア教育」を組み入れています。大学の学部の違い、職業の種類、仕事のやりがいなどを授業で紹介しています。これらの情報を提供する

ことで、塾生が早い段階で将来の具体的な目標を立てやすくなります。

昨年からは、授業の一部にアクティブラーニングも取り入れました。

塾生が2人1組になり、教師の出す問いに対し、聞き手と話し手に分かれて議論します。話し手は自分の考えをうまくまとめて、相手に分かりやすく伝える能力、相手の心に響かせる能力を身に付けること。聞き手は、話し手がしゃべりやすくなるような聞き上手になることが目的です。子どもたちが、早くから思考力やコミュニケーション能力を高める練習をすることで、社会に出てからも活躍できる大人になつて欲しいと考えています。

―福岡選手は、英進館の教育がどのように役立ったと思いますか。

福岡 僕は子どものころから「祖父のような医者になりたい」という夢を持っていました。練習や試合はハードでしたが、勉強がおろそかにならなかったのは、英進館で多くの情報を得て、今自分が何をすべきかを早くから自覚し、目の前のやるべきことが見えていたからだと思います。

いま、日本代表に選ばれていますが、受験に失敗し1浪したときは、ここまで高いレベルでラグビーをやるうとは思っていませんでした。2回目の受験の前期試験で医学部に落ちてしま

い、「医学部とラグビー、どちらを選んだら後悔しないだろう」と真剣に考えたのです。結果は「まだラグビーをやりたい」。両親も「医学部なら後からでも挑戦できる」と後押ししてくれ、別の学部を受けました。

どちらか一本に絞らず挑戦しようという考え方ができたのも、文武両道でも大丈夫だという自



信を持たせてくれた英進館のおかげだと思っています。

決して諦めない力が 開拓者を生み育てる

―今後、社会人から医学部を目指すそうですね。

福岡 実際に医者になりたいという気持ちを固めたのはある外科医との出会いです。高校2年生のとき、左膝の靱帯（じんたい）を損傷しました。U17（17歳以下）日本代表の合宿メンバーに初めて



選ばれ、参加する1週間前のことです。気落ちしていたところ、その先生が「けがをしたのが高校3年生のときじゃなくて良かった」と声を掛けてくれ、前向きな気

勉強と部活の両立を目指す 生徒さんを これから応援します



文武両道を極める自信は 英進館でつけてもらった

筒井 テクニックより、どれだけ勉強時間を捻出できるかについて考えました。それから短時間で集中することです。

福岡選手が医学部に通うのは30歳近くになるとありますが、目の前の与えられた課題に対して、一生懸命取り組んでこられた下地がありますから、年齢はハンデイになりません。むしろ困難を乗り越えチャレンジし続けた力がプラスになり、素晴らしい医者になれると思います。

―社会人から医学部を目指す福岡選手の姿は、多くの受験生に勇気と希望を与えそうですね。

筒井 子どもたちが高いレベルで頑張るためには、具体的に分かりやすい高い目標が必要です。福岡選手のようにトップアスリートとして活躍しながら医学部を目指すことは、子どもたちにとって最高の見本であり、励みになります。

―福岡選手から夢を目指す子どもたちにエールをお願いします。

持ちになれました。自分のような境遇になった人を支えられる、彼のような温かい医者になりたいです。

今年、実業団に入ると同時に英進館高等部で受験勉強を始め、さまざまな世界大会を経験し、その後に医学部合格を目指します。

―筒井社長も社会人から九州大学医学部に入学されています。効率的に勉強する方法はありますか。

英進館 代表取締役社長
筒井 俊英氏

ついついとしひで 1969年生まれ。久留米大学附設高校、東京大学工学部卒業後、92年に英進館に入社。3年間、算数科教師として教壇に立った後、95年に九州大学医学部に入学。卒業後、同大学付属病院に内科医として勤務後、英進館に復帰。2004年から代表取締役社長。

ラグビー日本代表
福岡 堅樹氏

ふくおか・けんぎ 1992年生まれ。福岡高校卒業後、2012年に筑波大学情報学群に入学。小学5年生から中学3年生まで英進館に通う。5歳でラグビーを始め、10年に第90回全国高等学校ラグビーフットボール大会に出場。13年にジュニア・ジャパン、日本代表に選出。

―部活と受験、どちらを優先しようか悩む人もいます。

福岡 部活と受験、どちらを優先しようか悩む人もいます。ですが、片方に絞る必要はありません。やりたいことをたくさん見つけ、できる限り努力し続けられれば、最終的に進むべき道が開けてくるはずです。諦めずにいろんなことにチャレンジしてください。僕も、日本を代表するスポーツ選手から医者へと転身する「パイオニア」になれるよう、競技にも勉強にも努力します。